

常磐松文庫蔵『九條家本源氏物語聞書』解題拾遺(五)

野村精一
渡辺道子
徳岡 涼

1

前稿(「年報」第二十六号所収「調査報告 四十七—十 常磐松文庫蔵『九條家本源氏物語聞書』解題拾遺(四)」末章において示唆したように、本書「東屋」巻における「林逸抄」の引用のあり方は、いささか注目に値する。よつて以下、その関わりについて触れることとする。

第1例は本書第五册五四丁オ一行目からである。

たいふかもと——薫の家人なり中君の女房也 大輔 うき

舟の方の女房を給へと云也^林

これに対応するのが、「林逸抄」の次項であろう。

たいふかもと——薫の家人也大輔歟(天理図書館蔵自筆本三一册9丁オ)

但しこの天理図書館蔵自筆本「林逸抄」(以下「自筆本」と称する)に於ては、その前項、

かたみにちりほはんも——中君のわか物おもはしき

身にともなひてもろともにや世にあるへきと也

の二行の間に挿入されたものである。内閣文庫蔵浅草文庫旧蔵本(以下「浅草文庫本」と称する)でもほぼ同様である。

ところで問題は、本書注文後半部分に見える「うき舟の方の女房を給へと云也」であろう。けだしこの項を含む「源氏物語」本文を参照するに、不審である。すなわち、潮廻舎文庫架蔵紹巴奥書本「東屋」のそれによるに、ここは、

たいふかもにもいと心くるしけにいひやりた

りければさるやうこそは侍らめ人にく、はし

たなくもなの給はせそかゝるをとりのものゝ、(二二丁ウラ)

人の御中にましり給も世のつねのこと也

あまりいとなさけなくの給せしこと也など

聞えてさらはかのにしのかたにかくろへたる処

……

とあるところである。因みに、この本文中「あまりいとなさけなき……」の一行、大島本、河内本などにこれを欠き、他方相似た一行を持つ陽明文庫本など別本類諸本に近い。存外古態のおもかけを伝えうる可能性もあながち否定も出来かねるところかもしれない。もちろん傍書の本行化も考えうるころではあるが、あえて注記してお

く。

それはさておき、この一文、要は、常陸守の反対で連れ子浮舟を左近少将に嫁がせることに失敗した中将の君が、やむなく異母姉中の君を頼つて、依頼状を送つた場面で、おそらく旧知の中の君つきの女房「たいふ」にも一便したところである。それぞれの注文は、この「たいふ」なるものの素性についての説明であるはずである。しかるに本書注文後半「うき舟」云々は、まったくそれとは関わりのない一文である。「林逸抄」にこれを欠くのは、当然のこととせねばならない。が、この一文、こちらでは、次の如くみえる。

このほとはあらせー 少将のむことりの間はこなたへ

と浮舟のかたの女房を給へと云也（自筆本八丁ウ、浅草文庫本も同じ）

こちらにも、いちおう、源氏物語本文を引いておこう。

…かみはいそきたちて女房なとこなたに」（潮廼舎文庫本一九丁オ）

めやすきあまたあるをこのほとはあらせ給へ

やかく丁なとをもあたらしうしたてられ

ためるかたをことにはかになりたためれはとり

わたしとかくあらたむましとて……

要は、右の前段、守が実の娘の婿取りに際して、大喜びしたものの準備が間に合わないの、浮舟つきの女房を動員しようとした件りである。

ここに注目すべきは、これに当たるところが、本書に立項されていることである。すなわち、右の「たいふかも」との直前、本書五三丁ウ最終行にはつぎのごとく見える。

此程はあらせ給へしー 少将の婿取の間はこなたへ浮

とあつて、丁を改める。まさにこれは、次丁二行目の、

舟の方の女房を給へと云也

に直接連結して、「林逸抄」の注文を完結していることとなる。これらの事實は、まさに本書が、転写本たるゆえんをしめすものにほかならず、さらには、書き本においてすら、行移りによる誤写のあつたことさえも想像させる。すくなくとも、本書の書写者の学力ないし注意力のほどを。こよなく示している現象であるとは、理解しうるであらう。こうしたできごとは、ふつう複数の伝本の比較のさいに見いだされることが多いが、本書のごとき、目下の処「天下の孤本」にあつては、見いだすのに相当の具眼のひとの存在を必要とするものだろうが、これをたやすく指摘しえたのは、ひとえに、「林逸抄」の存在が、あずかつて力あつたものとすべきであらう。

2

第2例以下、前稿補正をこととしたい。

さるもの、つらに顔を外さまに——さる物のつらとは柱の「

かた屏風などの方へかほを蔵し給也^林（本書第五冊五四丁ウ）

さる物のつらにかほはほか——匂宮の御さま也さる物のふり

にとは屏風などのかたへかほをかくし給也（自筆本三一冊一九丁ウ）

なお、後者には、「ふり」に重書「つら」、「屏風などの」に傍書「はしらのかたへ」とある。因みに、前記浅草文庫

本では、「ふり」とあつて、重書はないが、右の「傍書」は存している。同本文が「自筆本」の原初形態を残すものであることを示している証左たりうるのかもしれない。それはともあれ、これは、「林逸抄」注文の後半のみを採った例である。

第3例。

たゝなるよりはいとをし—— 晁にくはし 但うき舟にかたはら

いたくおほすらんと云説もあり如何ゝ、 又たゝなるよりは

いとをしとは双紙のことは也何となくいとをしと也^林（本書第五冊五五丁オ）

たゝなるよりは—— かたはらいたきとは浮舟の心を云

にや又中君のかたはらいたくや思ひ給はんと女房

とももの云を中君のきゝて何となくいとをしと思

給也^晁 又は双帯の詞也何となくいとをしと也（自筆本三一冊二三丁オ）

「林逸抄」所引の「晁花抄」の注文を省いたもの。〔

第4例。

お前にてえ耻あへ給はねは—— うき舟の右近

などにも打とけて見え給ぬを中君の御前にてはえ

かくれ給ぬなり^林

（本書第五冊五五丁オ）

おまへにてはえはちあへー 浮舟の右近などにもうち

とけて見え給はぬを中君の御まへにてはえかくれ

給はぬ也

(自筆本三一冊二四丁オ)

第5例。

私たちの侍らんやうなる—— 花鳥に委 又私たちは

萬ツニ枕をつかふもの也ものをうたかはしくおもふかたよりまかけを
さす也にくみ恨られ侍るとはうき舟をわたし置て疑はしく

心もとなき事によりこなたかちにさふらへはひ陸には恨み」

らる、となり 下の詞に御まかけこそと中君のの給もうた

かはしけにの給ふかわつらはしきと也

(本書第五冊五五丁ウ)

私たちの侍らん—— たちのなき間のでんほこりと

云事ありてんといふけた物はたちのなき時にほこる

を云ひたちのきたの方浮舟の君をいたちになすらへ

て云り心に此人を宮の御かたにあつけ奉りて心やすく」

思てわか心にてほこるやうなれはよからぬ物ともは

よのむすめなどにをのれをはつきもするやうに

うらみくねると云へる也花鳥 いたちは物をうたかは

しく思心ある也さてまかけをさす也にくみうらみられ

侍とは浮舟の君をわたしをきてうたかはしく心もと

なき事によりあなたかちにさふらへはひたちには

恨みらる、と也下詞に御まかけこそと中君の、

たまふもうたかはしけにの給ふかわつらはしき也(自筆本三一冊二五丁ウ)

なお、自筆本「うらみくねると云へる」に傍書「私たちはよろつ物にきをつかふ物也」。こちらは、「花鳥余情」の引用を省略したものとおぼしい。^②

3

以上、本書「東屋」における「林逸抄」にかかわる「調査報告」とする。その本旨に鑑み、論にわたることは、これを避けておくものとする。

注(1) 参考までに、現行活字翻刻本の「弄花抄」の関連部分を引いておく。

かたはらいたくそおほすらんと 中君のかたはらいたくや思ひ給ふら

んと女房ともものいふを中君の聞て何となくいとをしと思給也

(おうふう刊源氏物語古註集成版「弄花抄」による)

因みに「中君」に傍書して「私浮舟歟」とある由である。

(2) 参考までに、現行活字翻刻本の「花鳥余情」の関連部分を引いておく。

いたちのの侍らん心ちのし侍れはよからぬ物ともにくみうらみられ侍と

きこゆ いたちのなき間のてんほこりといふ事ありてんといふけた物

はいたちのなき時にほこるをいふ常陸の北のかたうき舟の君をいたち

になすらへていへり心はこの人を宮の御かたにあつけたてまつりて心
 やすく思てわか殿にてほこるやうなればよからぬ物ともはよのむすめ
 などにをのれをはずきにするやうにうらみくねるといへるなり

(おうふう刊源氏物語古註集成版「花鳥余情」による)

付表 調査報告四十七—五(「年報」十九号所収) 正誤

頁行 誤

正

- | | | | |
|----|----|-----------------------------|---|
| 3 | 7 | 来世に通して | 末世に通して |
| 6 | 10 | おもふ様 <small>ずみ</small> なり | おもふ様 <small>ずみ</small> なり ※脚注・下二擦消ノ痕有り。 |
| 7 | 11 | 舟 <small>ふね</small> さほと讀也 | 舟 <small>ふね</small> まほと讀也 |
| 8 | 13 | 今はのとぢめに成て | 今はのとぢめに |
| 10 | 4 | 川のむかひ也 | 川のむかひなり |
| 10 | 10 | 大きみ | 大きみ |
| 10 | 22 | いか、さおぼさ <small>ざ</small> らん | いか、おぼさ <small>ざ</small> らん |
| 11 | 15 | 中納言にはかうと | 中納言にはかうも |
| 11 | 18 | 物みえぬ心 <small>ち</small> し給へは | 物みえぬ心 <small>ち</small> し給へは |
| 11 | 19 | 我 <small>レ</small> さかしう | 我 <small>レ</small> さかしう |
| 13 | 7 | わが御みつからのこと、は | わか御みつからのこと、は |
- ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 ※脚注・下二擦消ノ痕有り。

13 大君のわが事とは
 7 姫君の哥也
 14 4 姫君の哥也
 14 11 早竟のたしかなる
 14 11 随イ給ふな
とのをしへ依
 14 15 悞イの儀也
 14 23 たゝにとあらぬ
 15 2 句への御返事
 15 9 さるかたにたえこもりて――
 15 11 苦しからすと也同
 16 3 人のあいしらへに
 17 6 底にかくおはす
 20 14 かしこけれど
 22 23 三月の夜なれは
 23 13 たくひあらじいや
 23 16 めもはなもなをし――
 26 1 人ニかはりたる叟也
 28 8 氷とけぬは打たる衣
 28 21 なまうしろめたければ――

大君のわか事とは
 姉君の哥也
 畢竟たしかなる
 随イ給ふなと ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
のをしへ依
 悞イの儀也
 たゝにもあらぬ
 句への御返事 ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 ※一行スベテ一文字上ゲル。
 苦しからすと也林
 人のあいしらへに ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 底ふかくおはす
 かしこけれど ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 三日の夜なれは
 たくひあらじはや
 めもはなもなをし
 人ニかはりたる叟也
 氷とけぬは打たる衣 ※脚注・下二擦消ノ痕有り。
 なまうしろめたかりければ――

29 23 思オホし捨給はじ
 30 16 尤オホに愛に相叶へり
 31 8 いひしらずかしづくもの、――
 31 22 給つらんと
 32 17 開事のやうニ有て
 32 19 みる也当説也
 34 3 此言葉より
 34 15 もとすゑをとりて――
 35 6 薰ノ歌也此儀よし
 35 20 弁の詞也
 36 6 あね君の事を
 36 9 咲花ニ詳
 36 13 薰匂官へ御参る也
 37 13 相手也
 37 19 あまりおほけなかりける
 38 14 こしのしるし――
 44 1 せじニし文字濁欵
 44 9 しか仰事侍りし――

29 23 思オホし捨給はじ ※脚注・下ニ擦消ノ痕有り。
 30 16 尤オホに愛に相叶へり
 31 8 いひしらずすかしづくもの、―― ※脚注「す」濁点ヲ擦リ消ス。
 31 22 給つらんと
 32 17 問事のやうニ有て
 32 19 みる也両説也
 34 3 此言葉より
 34 15 もとすゑをとりて―― ※脚注下字ヲ擦リ消シタ上に書く。
 35 6 薰ノ歌也此儀よし
 35 20 弁か詞也
 36 6 あね君の事を ※脚注下字ヲ擦リ消シタ痕有り。
 36 9 咲花ニ詳 ※脚注下字ヲ擦リ消シタ痕有り。
 36 13 薰匂官へ御参り也
 37 13 相手也 ※脚注下字擦リ消シタ上ニ重ネ書キ。
 37 19 あまりおほけなかりける
 38 14 こしのしるし
 44 1 せじニ、文字濁欵
 44 9 しか仰事侍りし―― ※脚注「あ」字ノ上ニ「侍」ト重ネ書キ。

65 9 必其目ニ
 65 8 そんなじやうそれえふりたる
 62 4 如此おぼす也
 58 19 河海の説共猶あり
 58 5 置給を云り林
 56 19 侍徒云也
 53 19 時方か返事也
 52 8 本性
 51 7 御まら。とは
 51 5 宮の北のかたのもとに
 50 10 又平聖の末
 50 4 彼山ニシテ
 49 23 清水寺ニ發誓願ニ曰
 49 15 ことたにおしきと宮の打す――
 47 7 續勞ラ申レヌ官ヲ云々河海
 46 21 主人ノ
 46 19 こもし濁ル方
 45 7 ひんなき

ひんなき方
 こもし濁ル
 主上ノ
 續勞ラ申レヌ官ヲ云々河海 ※脚注下字ヲ擦リ消シタ痕有り。
 ことたにおしきと宮の打すし
 清水寺ニ發誓願ニ曰
 彼山ニシテ
 又平野の末
 宮の北の御かたのもとに
 此まら。とは
 本性 ※脚注擦リ消シノ痕有り。
 時方か返事也 ※脚注下字ヲ擦リ消シタ痕有り。
 侍徒也
 置給を云り林
 河花の説共猶あり
 如此おぼす也
 そんなじやうそれ参りたる
 必御目ニ

67 人の志をきたると

人の志をきたるを

68 けかれたる所にては

けか^レれたる所にては ※脚注下字ヲ擦リ消シタ痕有り。

69 曳哥しつ、末忘却
「(77ウ)

曳哥しつ、末忘却

69 (三行分空白)
「(78オ)

(三行分空白) 「(77ウ)

69 (白紙)
「(78ウ)

(白紙) 「(78オ)

69 古抄共にくはし

(白紙) (78ウ)

69 古抄共にくはし

古抄共にくわし

70 手習ノ君の心也

手^レ習ノ君の心也 ※脚注下字ニ重ネ書キ歟。

74 恠門あかつきいたりて――

恠門にあかつきいたりて――

75 かの女のやうそく

かの女のさうそく

76 還^レ迹^{キヤウザク}

還^レ迹^{キヤウザク}

78 まかりをりん事――

まかりをりん事

78 打つけにいられんも――

打つけにいられんも

後記

※以下は注記。なお、校正に当って、上野英子氏を順わせる所多大である。記して謝する。